

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：33910

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580019

研究課題名(和文)NHKラジオ放送の子供番組における「童謡」の成立と変容 1935-52年を中心に

研究課題名(英文)The formation and transformation of "children's song" in the child program of the NHK radiobroadcast :Focusing on 1935-52

研究代表者

大地 宏子(OCHI, Hiroko)

中部大学・現代教育学部・准教授

研究者番号：80413160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：團伊玖磨《ぞうさん》をはじめとする「子どものうた」の多くは、NHKのラジオ番組『幼児の時間』の委嘱により戦後に作曲され、ラジオ放送を通して普及したものであるが、既に戦前からNHKは熱心に童謡の放送を行っていた。当初雑誌に発表された大正童謡も、電波に乗ることで初めて「国民の歌」となった。本研究は、こうした童謡放送の成立を昭和初期にまでさかのぼりつつ、主としてNHK放送博物館の資料に基づき、戦中から戦後に至るその歴史を通史的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Most of "Kodomo no uta(songs for children)" such as Ikuma Dan's "Zosan(The Elephant)" were written after the war commissioned by NHK radio program "Yoji no jikan(Time for infants)" and spread through radio broadcasting, but NHK had already been broadcasting children's songs with zeal even before the war. Children's songs that were first published on magazines during the Taisho period became "National people's songs" after being broadcast. This study winds the establishment of children's songs broadcast back to early Showa period, while making clear the overview of its history from during to after the war.

研究分野：音楽教育史

キーワード：幼児の時間 うたのおばさん 子供の時間 ろばの会 レコード童謡 童謡歌手

## 1. 研究開始当初の背景

戦前から戦後にかけてのラジオ放送の社会的役割については、既に主としてメディア論からの研究が相当なされている。しかしながら、戦前から音楽番組、とりわけ子供用のそれについては、これまでほとんど調査されてきていない。とりわけ本研究が対象とするラジオの子供番組における童謡は、極めてアクチュアルに時代毎の世相を映し出しており、また放送メディアと密接に結びついた新しい音楽創作のありようの例としても興味深い。にもかかわらず特に戦後についての調査はまったくなされてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究はNHKラジオ放送の三つの番組『子供の時間』『幼児の時間』『うたのおばさん』を対象とし、調査する時代を『幼児の時間』放送開始の1935(昭和10)年から、テレビ放送が始まる1952(昭和27)年までとした。そして上記の三つの番組についての基礎情報をデータベース化し、戦前から戦中を経て戦後に至る時代毎のラジオ童謡の音楽様式の変遷を明らかにし、戦前ドイツの同種の番組との比較を通して日本のラジオ童謡の特質を浮き上がらせることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) NHK放送博物館所蔵の一次資料(番組確定表や番組台本)に基づいて、戦前から戦後にかけてのラジオ放送『子供の時間』と『幼児の時間』における童謡プログラムの通史的な基礎データを提供する。

(2) 従来の文学研究やメディア論のアプローチと異なり、番組編成や楽曲成立や歌詞内容といった「音楽外」の事柄だけでなく、楽曲分析(とりわけ用いられる音階ならびにリズムのパターンのそれ)を通して、音楽様式の変遷を辿る。

(3) ドイツとの比較を通して、日本のラジオ放送用の童謡の制度上・受容上・音楽上の特徴を、グローバル比較の視点から考察するための枠組みを提供する。

## 4. 研究成果

(1) 番組確定表による童謡プログラム調査  
『子供の時間』(毎日放送)で放送された童謡プログラムは、戦前戦後を通して主に大正童謡とレコード童謡(特に戦後は量産され童謡歌手らによって隆盛を極めた)が占めていた。また、出演者に注目すると、歌唱を指導する作曲家、および歌唱する歌手(少女の童謡歌手で、いわゆる童謡スター)や合唱団

(多くの場合、童謡歌手の育成を目的に作曲家がつくったもの)の多くは、レコード会社と専属契約を結んでいたことが分かった。なお、小学生を中心とする子ども対象の同番組は、科学や歴史など多様なプログラムを編集していたため、童謡などの音楽プログラムは学校放送の開始された昭和10年以降、徐々に減少していく傾向にあり、戦後は童謡が放送されるのは月に5回程度であった。

『幼児の時間』(月～土曜放送)で放送された童謡プログラムは、『子供の時間』で放送されていた大正童謡やレコード童謡はほとんど見られず、戦前は小学校教員らによって作られた新作童謡を中心に、戦後の、とりわけ『うたのおばさん』の放送が始まった昭和24年以降は同番組と連動する形で、東京音楽学校出身の新進作曲家たちを起用した新しい「子どものうた」が次々に創作された。なかでも特筆すべきは中田喜直、磯部俣、宇賀神光利、大中恩、中田一次の作曲家で結成された「ろばの会」(1955年)による画期的な活動で、彼らはそれまでの童謡とは一線を画した戦後の新しい童謡(「童謡」とは呼ばずに「子どものうた」)の創作を目指し(大中恩氏の証言による)、それらは『幼児の時間』と『うたのおばさん』で連日放送された。また、出演者の中にはレコード会社との専属契約者はほとんど見られず、(番組チーフディレクターの証言によると)童謡歌手を出演させることは一切なかった。こうした制作理念は、子どもに向けた歌であっても大人の声楽家によって歌われることをスローガンにした『うたのおばさん』にも共通するもので、両番組が戦後の「子どものうた」の方向性を主導したことは間違いない。

以上の両番組の童謡プログラムの比較調査を通して、各々が異なる目的で番組を編集していたことが明らかとなった。つまり、『子供の時間』ではレコード童謡をはじめ既存の楽曲を、『幼児の時間』では新規に生成された新曲を提供することで、前者は「娯楽」番組として、後者は「教育」番組として、各々の役割が棲み分けられていたように考えられる。

## (2) 音楽様式の変遷について

大正期の童謡をはじめとする戦前の童謡における音楽様式について、ヨナ抜き音階/2拍子か4拍子/付点リズムの多用など、その典型的な特徴は既に明らかにされている。そこで本研究では、『幼児の時間』で放送された「子どもうた」が楽譜として現存している月刊番組テキスト『ラジオえほん』(昭和24年10月～26年1月のみ現存)と『NHKうたのおばさん楽譜集』(1957年)を手がかり

に、戦後の「子どものうた」の音楽的側面に着目し、その傾向を考察するとともに、「ろばの会」のメンバーで唯一存命の作曲家、大中恩氏への聴取から浮かび上がった戦後の「子どものうた」の創作プロセスの一端を明らかにした。

『ラジオえほん』に掲載されている楽曲 30 曲について

・ヨナ抜き音階が 12 曲 (40%)、7 音を使った西洋音階が 10 曲 (33%) で、西洋音階による楽曲が増えた。

・大正の童謡作曲家はほとんど見られず、「ろばの会」の作曲家 (5 曲) や「ろばの会」を先導した作曲家 (團伊玖磨や芥川也寸志の 2 曲) から戦後に活躍した作曲家たちによる世代交代が確認できる。彼らの楽曲の特徴として、以下の点が挙げられる。

) 大正期の童謡に多く見られた付点を用いたリズムパターンに当てはめるのではなく、「ことば」のもつリズムを生かした多様なそれが使われる。

) 大半の楽曲は西洋音階で作られ、メロディーはもとより伴奏が複雑化している。単にメロディーを支える和声にとどまるのではなく、内声の響きなどによって繊細な色彩を表したり、強弱、速度、ペダル等の演奏指示を細かく記したり独立した楽曲のように緻密に描かれている。

『うたのおばさん楽譜集』に収録されている楽曲について

・全 85 曲の内訳；NHK が『幼児の時間』に委嘱したもの 12 曲、『うたのおばさん』に委嘱したもの 28 曲、大正から戦前の児童雑誌に掲載された童謡 8 曲 (うち後にレコード化されたもの 4 曲)、レコード童謡 5 曲、『えほん唱歌』や『幼稚園唱歌』など唱歌の類 11 曲、その他 (出自不明など) 21 曲

『赤い鳥』からの流れを引く児童雑誌生まれの童謡が、曲集全 85 中わずか 8 曲 (9%) しか掲載されていないことから、戦後の新たな童謡の流れがこの童謡集からも見てとれる。

・収録された楽曲の作曲家について；曲数の多さでひととき目を引くのが中田喜直 (9 曲)、次いで團伊玖磨 (5 曲) で、それに平井康三郎 (4 曲)、芥川也寸志 (3 曲)、平尾貴四郎 (3 曲) が続く。「ろばの会」の中心的作曲家として活動した中田喜直が、戦後の新しい子どもの歌のパイオニア的存在だったことを示している。

大中恩氏への聞き取り調査

・「ろばの会」の作曲家たちの会合には、「詩人の意識を変える (= それまでの大正童謡とは異なるものを目指す)」ために童謡作詞家

にも参加を求めた。一つの詩に複数の作曲家が作曲し、メンバー同士で討論するという作詞家と作曲家との共同作業を通してより良い作品を模索していった。

・子どもに向けた歌を作曲する際、一般的には認められていなかった音程の跳躍や複雑なリズム等の制限を取り払い (少々難しいメロディーであっても、子どもたちは耳でコピーして歌えてしまう現状を確認したため)、「子どもだからといって妥協することなく」創作に取り組んだ。結果、従来の童謡に比べ、伴奏は難しくなった。

・日本語のニュアンスをできるだけ正確に表現することを第一に、「音高よりもリズム」に腐心した (メロディーが先行されるのではなく、「ことば」が先にある)。結果、歌いあげるといっても、「話している」ような自然で自由な旋律 / リズムを目指した。

(3) 1920 年代に世界中で急速に普及したレコードとラジオという録音メディアが、従来のインターフェイスな音楽聴取のありようを劇的に変えたことは言うまでもない。そしてラジオ放送においてはドイツにおいても子供番組が重要視されており、既にラジオ局が開局した 1924 年からこうした番組の中で童謡などが流されていた。ラジオはいわば特定の空間 (国家など) に住む人々の心性を特定の色で染め上げる役割をもっていた。こうした番組にはユーゲント音楽運動の指導者のフリッツ・イエーデ (Fritz Jode) も出演していたことが知られており、彼はラジオを広く国民が音楽に親しむことを可能にするメディアだと考えていた。イエーデはナチスに強い共感を持っていた人物であるが、こうしたラジオ・メディアを通じた「よい子」の心性涵養は、やがてナチスは政権をとるとともに、各家庭に一台のラジオ受信機を設置することを試みた。そこで流される音楽にはとりわけ、特定の空間を「故郷」として国民に刷り込む役割が与えられていたと思われる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

大地 宏子「戦前の唱歌教育における唱歌教授の変遷 (1) 明治 10 年代の小学校教師用書を中心に」『中部大学 現代教育学部紀要』、査読有、9 号、2017、23-34

〔学会発表〕(計 2 件)

大地 宏子「神戸市公立小学校における音楽専科教員制度への軌跡 明治期の音楽専科教員を中心に」音楽教育史学会大会、2016.5.7、日本女子大学 (東京都・文京区)

武田 康孝、大地 宏子、佐藤 英、西村 理  
「日本の音楽放送 歴史研究の現状と手法、  
問題点について」日本音楽学会全国大会、  
2014.11.8、九州大学大橋キャンパス（福岡  
県・福岡市）

〔図書〕（計2件）

小熊 伸一、三島 浩路、吉田 直子、深谷  
圭助、大地 宏子 他 18 名、学術出版社、『教  
科教育の新展開 2016』、2016、261（40-62）

佐野 靖、杉本 和寛、大地 宏子、他 6 名、  
東洋館出版社、『文化としての日本のうた』、  
2015、269（67-97）

## 6．研究組織

### （1）研究代表者

大地 宏子（OCHI, Hiroko）  
中部大学・現代教育学部・准教授  
研究者番号：8 0 4 1 3 1 6 0

### （2）研究分担者

岡田 暁生（OKADA, Akeo）  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：7 0 2 4 3 1 3 6